こんなんしてます。

わだいのしごと

124

Circulation―「血」の流れ

循環型社会

Circulationとは循環という意味です。循環型社会とは、使えるゴミを回収し、資源として再生、再使用することで、環境への負荷を抑えようという考え方。大学の研究を地域の中で活用することを「知の循環」などといい、地域の生産物を地域で消費する地産地消は、地域内でお金が循環する社会のあり方が目的の一つでもあります。

身体の血行が悪いと健康に弊害が出ます。つまり、「循環」の意味を社会学的に解釈すると、健康的な地球環境や、地域社会、身体を未来へと引き継ぐための社会行動、と解釈できます。

では、地域における「血」とは何でしょうか？地域で回るお金以外にも、自然環境、伝統技術、歴史、文化、住民の意欲など、地域のあらゆる資源が「血」であると捉えられ、血＝地域資源が、地域内で充分に活用され、生き生きと地域内外をめぐることが元気で健全な地域の姿、といえます。

さらに地域資源は、新事業や農産物、観光などの形で外に向かって出され、所得や移住といった付加価値を生んで地域内に還元されます。筆者は以前、これらを地域づくりのcirculation＝循環、還元モデルとして論文にしたことがあります。

現在の地域づくりでは、地域資源を外に向かって創出することに目が行きがちです。しかし、あまり成功をしないのは、元となる「血」が滞っているからです。高齢化の進行で地域資源が活用されず、地域は深刻な動脈硬化の状態となり血液が地域の中をサラサラと流れていないのです。

お年寄りと学生の協働作業

当たり前の光景に

今年も和大生20名とともに古座川町にユズの収穫支援に入りました。

市場の評判がよい古座川のユズですが、高齢化のために営農が困難になり、ボランティアが山に入り、微力ながら産地の維持を支援しているのです。

ユズを1個1個収穫する作業は、かなり忍耐のいる仕事。山肌の斜面で高ばさみを操作しユズを満載したコンテナを運ぶのは重労働です。

80歳を過ぎ身体の自由がききにくい農家の方に、学生が農業用モノレールの操作方法を教わり、作業を交代する光景がありました。

60年の人生経験の差のあるふたりが顔を寄せ合い、教え、学ぶ光景は、なんと自然なのでしょう。元々地域にはそんな日常があったはず。現在の若者の柔軟な適応力を頼もしく思いました。お年寄りと若者が共に働く姿が普通の光景にならないものでしょうか。

「衰退する地域に特効薬はない、少しでもできる方法を積み上げて踏みとどまろう」そう言ったのは、この地区の元区長さん。移住、事業化、観光など政策がせっつく成果に惑わされず、先ずは生活と生業を見つめ、日常の元気な血のめぐりを取り戻すための一歩を模索し始めた言葉です。

山に若者は似合う

滞っている血液は、一人の若者から溶け出すかもしれない。しかし、その若者はいきなりやってくるのではなく、健やかな血液をもつ日常の延長線上に現れるのでしょう。

モノレールの操作を教わった学生は来春、故郷の役場に就職が決まりました。彼は4年間でこの山村に8回も入っています。地域の痛みと地域の知恵と価値がわかる職員になってくれるはずです。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。